
星空を、もう一度。

熊川修

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星空を、もう一度。

【Nコード】

N5599X

【作者名】

熊川修

【あらすじ】

人類による最終戦争が世界を包み、『西暦』という時代が終わりを告げる。

戦火の爪痕は人類から『星空』を奪った。

大戦から数百年後。ある小さな島に暮らす、4人の少年少女達。だが、永遠と思われた彼らの平穏は唐突に崩壊を迎えようとしていた。

【少年少女の友情と恋愛とファンタジー的なお話です】

私が所属している同人サークルのHP上に掲載した小説を加筆・

修正したものです。
(作者本人による)

プロローグ

——『神^{かみ}の火^ひ』が世界を焼き尽くし、『西暦^{せいれき}』は終わりを迎える。

——戦火の爪痕は、晴れない曇天となりて残り。

——世界から、『星空^{ほしぞら}』は消えた。

世界の、東のはずれに位置する小さな島がある。

特別な観光地でもなく、そこに暮らす島民の数も決して多くはない。

面積のほとんどを森林と山岳地帯が占める、四方を海に囲まれた孤島。

ある夜更け。

この島にいくつも存在する、なんの変哲もない丘。

その丘の頂上を目指して歩を進める、3人の男女の姿があった。

1人は青年。1人はその青年の妻。そしてもう1人は、彼らの幼い愛娘。

3人は手を取り合い、時に励まし合いながら、やがてその丘を登りきる。

「あなた……空が」

「うん……」

軽く弾んだ呼吸を整えながら、夫婦は空を見る。

かつて、見上げればそこにあったはずの『星空』。

『西暦』と呼ばれていた時代、『古代』^{こだい}の終わりに起きた、人類による最終戦争。

『神の火』と呼ばれた戦火の炎が地上を焼き尽くし、世界中の空が曇天となって数百年。

未だ空を覆う雲は晴れることなく、もはや人々は伝承の類でしか『星空』を知る術はなかった。

「見てごらん……」

青年は娘の手をとり、空を見るよう諭す。

いつもと同じと思われていたこの夜。

皆が寝静まったこの島の上空で、奇跡は起きた。

「……あれが、『星空』というモノだよ」

父に促され、少女は空を見上げた。

そこには、空を覆い隠す雲の僅かな切れ間。

その向こう側に、たしかに見える、『星空』という名の輝く世界。

「ほしぞら……」

少女は産まれて初めて目にしたその景色の名をつぶやく。

やがて、流れを止めぬ雲が再び星の光を隠しても、彼女は空を見上げ続けていた。

それは、10年前の夜。

少女がたしかに見た、小さな島での、小さな奇跡。

島の少年たち 1

世界の、東のはずれに位置する小さな島。

人口3万人にも満たないこの島は、その面積のほとんどを森林と山岳地帯が占めている。

特別な観光地でもなく、主な産業は農漁業。

そこに、この島でしか採れない珍しい樹木の船交易が加わり、島民たちの暮らしは成り立っていた。

「ハッ……ハッ……！」

この島の中心から少し外れた丘陵地帯を駆ける、1人の少年。彼は滑るように丘を下り、森の中に飛び込んだ。

「ハア……ふう……」

森に飛び込み、大木に背を預けた少年は一息つき、木陰から後方をうかがう。

「……撒いたかな？」

しかし彼の期待に反して、丘の上から次々と降りてくる人影。少年を逃がさんとする、この島の大人たちである。

「……やっぱりそう甘くないか」

——どっちに行った！？

——たぶん森の中だろう……身を隠すにはうってつけだ

——横に広がれ！ 木の陰にいるかもしれん！

「……ちえつ。バレてら」

大人達は先の号令で横並びとなり、海岸に波が迫るようにならないうちにこちらに向かってくる。

「しょーがない……またひとつ走りか」

この場所に隠れてやり過ごすことは出来ない、と。

そう判断した少年は先手を打って木陰から飛び出し、追っ手から逃れるため森の奥へと走り出した。

——いたぞおお！ 逃がすな！

——見失うなよ！

——いいかげん捕まえろ！

少年の予想通り、彼の後姿を見つけた大人たちは口々に叫び、逃すまいと追いかける。

誰も彼も日頃の重労働で鍛えられた肉体だらけの、恰幅のいい大人たちだ。

捕まったあかつきには、相当な仕置きが待っていると考えてよいだろう。

無論、少年が捕まればの話だが。

（へっ……そう簡単に捕まってやんないよ！）

その影だけを目で追うならば、獲物を追いかける猛獣かと錯覚してしまいそんな機敏さ。

瞬間的な加速力はもとより、彼はその速度を持続させた状態で木々の間を走り抜けていく。

全速力を目指しつつも、木々にぶつからないよう走るのが精一杯な大人たちでは追いつけという方が無理な話だろう。

ふと気付けば、追っ手の大人たちの声も影も、ずいぶん遠いものになっていた。

「……へへっ！」

草花に足をとられることなく、最小の動きで木々を避け、時に枝から枝へ飛び移りながら、少年は圧倒的な速度で森の中を駆け抜ける。

どれほど走っただろう。彼はいつの間にか、森の出口へとたどり着いていた。

「全然来ないな……おっちゃんたち」

森を抜けたところで立ち止まり、振り返るが人影はない。

森の中では大人たちが今も必死に追いかけているのだが、すでに少年との距離は開きすぎていた。

「んー……」

少年が振り返れば、彼の前方には平野が広がり、その先には川が

見える。

ここからでは遠くてほとんど見えないが、あの川を越えた先には少年の暮らす村がある。

少年が立つこの場所から、あの村まで。

目にしただけでため息が出そうな距離だと人は言うかもしれないが、彼の足ならばそれは大した問題にならなかった。

むしろ、これだけの距離を全速で駆けることが出来るのは、少年にとっては悦びだった。

「……よしっ。もうひとつ走りっ！」

少年は顔を上げ、前方に見える川を目指して再び駆け出した。

島の少年たち 2

大人たちに追われ、森を駆け抜けた少年が村外れの川を目指して
いた頃。

その川には2人の少女がいた。

彼女たちは会話をしつつ、かごに山積み状態となっている大量の
衣類を洗濯している。

「ええっ……！ そんな物があつたの？」

感嘆にも似た声をあげた片方の少女、名を『イリヤ』という。

彼女の外見を言葉で喻えるならば、「癒しの花」とするのが適当
だろうか。

まだ幼さは残りつつ、女性らしい柔らかな雰囲気は既に充分纏っ
ていると言っている。

頭髪は黄金が溶け込んだかのような淡いブロンドのショートカッ
ト。やや長く伸びた前髪の一部は小さな髪留めで止めている。

整った目鼻立ちは少女としての幼さと愛らしさ、それでいて今に
花開かんとする、少女から女性へと向かう美しさの双方が調和され
ていた。

「そうよ？ 古代人の技術ってのは、それはもう凄かったんだか
ら」

イリヤの驚愕の言葉に、得意気に返す赤髪の少女『メル』。

イリヤと同じように例えるなら、こちらは「美しいがトゲのある
花」と言えよう。

炎のように赤く、長い頭髪を左右で2つに結った髪型が特徴的だ。ややつりあがった目尻。その瞳の透き通るような色合いと美しさはまるで瑠璃色の寶石。

動きやすさを重視した、少々露出の多いラフな服装。同年代の少女達と比べて発育のいい身体のライン。

イリヤとはいいい意味で対照的であり、活発な印象と女性としての魅力を共有している。

「ゼーんぶ勝手に洗濯してくれるのかあ……いいなあ」

会話は続けながらも、作業の手は止めない。

汚れた衣類を川の水で濡らし、洗濯石を擦りつけて汚れを落とし、再び川の水に浸けて洗い流す。

カゴの中の汚れた衣類を全て綺麗にするまで、ひたすらこの作業の繰り返しだ。

もちろん、全て彼女たちの手作業である。

「それだけじゃないのよ？　なんと洗い終わった洗濯物を乾かすところまでやってくれるんだから」

「え……ええっ！？　どうやって？　どうやって？」

「あ、うーんと……」

メルは言葉に詰まってしまった。

この情報は物知りの友人から聞いただけで、彼女自身もこれ以上深くは知らないのだ。

「ね。ね。どうやって？」

「んー、えつと……」

イリヤからの追求に彼女も必死に頭を働かせるが、汚れた服を全て自動で洗濯し、あまつさえ洗い終わった服の乾燥まで行う工程な
ど思いつけない。

とはいえ、まるで自分が発見したかのように伝えてしまった以上、簡単に「それ以上は知らない」と認めるのも彼女としては情けない
気がしてならない。

「えーつとね……その……ん？」

どう答えたらいいものかとメルが頭を捻っていたちようどその時、
彼女たちが洗濯をしている川の上流方向から、聴き慣れた少年の
声が出た。

それも心底楽しそうなはしゃぎ声である。

「この声……『アル』？」

「アイツか。ま、べつに……」

べつにいいけど……そう言って流そうとしたメルだったが、そう
はいかなくなつた。

彼女たちが洗濯をしている川の上流……2人が『アル』と呼ぶ少
年の声が出た方向から、泥やら葉っぱやらで汚れた水が流れてきた
からである。

これではここで洗濯を続けても洗っている意味がない。

「……………」

「……アルのことだから、遊んでて汚れた服でも洗ってるのかな……？ はは……」

「……………」

「メ、メル……？ あのう……」

瑠璃色の宝石だったメルの瞳は、怒りに燃え上がる蒼炎の火へと変わっていた。

「行くわよ」

「でも、洗濯がまだ……」

「……………」

「う、うんつ。そうだね！ 行こう行こうっ！」

無言の気迫に圧されたイリヤは慌てて洗濯カゴを抱え、彼女の後をついて行った。

島の少年たち 3

「いやっほーい！」

丘を越え、森を抜け、平野を駆け抜けた少年『アル』は川の上流に到着するや否や、水の中へ飛び込んだ。

「ぷっはあ！ ふいー……」

一度川の底まで潜ってから、勢いよく水面へと飛び出す。

水を浴びた猫のように頭を振るい、髪から滴る水を飛ばすと、今度は無邪気に泳ぎ始めた。

彼の年齢からすれば幼い行いかもしれないが、当の本人はご満悦な様子である。

「おっ！ 魚発見！」

夕食のおかずには一品加えようと、川底に漂う小魚の群れを夢中で追い回す。

背後に迫る、サメも泣いて逃げ出しそうな殺気に気付かずに。

「ああっ！ 逃げられたか……」

「……ずいぶん楽しそうね？」

「おう！ 走った後で、気持ちいいし！」

「ふふ……でもね、そのおかげで迷惑してる人間もいるのよ？」

「ん……？」

ここで初めて、アルは声のする方向へ顔を向けた。

「——ぶっ！？」

その瞬間、彼の視界には握り拳しか映らなかった。牛に突進でもされたかの如く、アルは派手に吹き飛んで落ちた。

しかし彼の耐久力もなかなかのもので、すぐに体勢を立て直して水面へと顔を出す。

「いててて……なにすんだよいきなり！？」

「なにすんだよ？ ……じゃないわよこの馬鹿アル！」

「あだっ！？」

怒号と共に、メルが追撃の握り拳を叩きつけた。今度は頭頂部に。

「ぐ……」

「アンタねえっ！ 泳ごうが溺れようが川の中でお漏らししようが構わないけど、下流でやりなさいよ下流で！」

「メル……最後のは構おうよ……」

重たい洗濯カゴを抱え、やっとこさメルに追いついたイリヤがため息混じりにツッコミを入れる。

「イリヤ……！ 居たんだ？」

「あ、うん。下の方でメルと洗濯をね……」

「くおーら。話はまだ終わってないの……よっ」

「フギヤっ!?!」

イリヤの方に目を奪われたアルの髪を掴み、自分の方を向くように容赦なく首をひねる。アルの首から少しだけ嫌な音がした。

「め、メル、さすがにちょっとやり過ぎじゃ……」

「乙女2人の洗濯タイムを邪魔した罰よ。私刑及び極刑に値するわ」

「なにもそこまで……?」

背後から誰かの声が聞こえた気がしてイリヤたちは振り返った。

島の少年たち 4

ここからはそれなりの距離があるが、何人もの大人たちがこちらに向かって走って来ているのが見える。

どうにも穏やかな雰囲気でないことだけは感じ取れた。

「何かあったのかな……？」

「あちゃー……もう追って来たか」

「……なに？ アンタまたなにかやったの？」

「いや。悪いことはしてないんだけど、なんか追いかけてさ。あいかわらずしつこいんだコレが」

腑に落ちないといった様子のアルを見てイリヤは、なにかマズいことをしたから追いかけるんじゃないかと言いつうになったが、彼女が口にする前にメルが質問した。

「何かしたから追われるんでしょうよ……アンタ、またあれをやらかしたんじゃないでしょうね？」

「いや、だってちょっと柵を越えて、見てただけなんだけだぜ？ ちよつとしか触ってないし、もちろん壊してない」

「……言つとくけど、アンタそれ全部この島では禁忌とされてるコトだからね」

「そりゃ、あれだけ怒るよねえ……」

「うーむ……」

この島には、島民たちの中で侵してはならないとされる物がある。

島はずれの小高い丘、その上にそびえ立つ……『古代の遺産』と呼ばれる物。

滅びの日を越えて今なお残る、古代文明の建造物。

特別な日を除き、島民たちがこれに近付くことは許されていない。当然、遺産の周りはびっしりと柵が築かれており、聖域として常時見張りまでついている状態だ。

しかし興味を抑えきれぬアルは、たびたびこの聖域へと忍び込み、今日のように島中の大人たちから追い掛け回されていた。

「なんでダメなのかな？ 俺、何回もあそこに入ってたけど、何も危ない物なんてなかったぞ？」

だが何度見つきり、追いかけられ、捕まって説教されようが、本人に反省の色は皆無だった。

「危ないかどうか大人たちにも分からないから、近付くなって言われてんでしょうが！」

「そ、そうだよ。何かあってからじゃ……」

「んー……………」

2人からの忠告について、アルは数秒間検討してから結論を口に

する。

「やだ。納得いかない」

「やだつて……アンタねえ」

「だつてさ……お？」

こうしてやりとりをしている間にも、大人たちはアルを捕まえようとこちらに迫ってきていた。

「やべっ。ゆっくりし過ぎたか……」

アルは川から上がり、今度は村に向かって再び駆け出した。

「あっ……そうだそうだ」

が、すぐにイリヤの方へ向き直した。彼女が抱えていた洗濯物いっぱいのカゴを、ひよいと受け取る。

「えっ……アル？」

「逃げるついでに運んどく。玄関の前に置いとくから……んじゃ、またな！」

イリヤが遠慮する暇もなく、アルは洗濯カゴを抱えたまま村の方へ走り去っていった。

「あ、アル！ ちょっと……もう行っちゃったし。……相つ変わらず足はスゴいわね。頭はてんでダメだけど」

「あはは……あつ」

何かに気付いたらしいイリヤが、急にオロオロとし始めた。

「イリヤ、どしたの？」

「あのカゴ……まだ洗ってないのも入ってた」

「……………」

「あ……あはは」

「あ・の・バカはああ……！」

怒りに身を震わすメルの横を、血眼にアルを追っている大人たちが走り抜けて行った。

島の少年たち 5

——翌日。

今日も今日とてアルは聖域に侵入し、『古代の遺産』をじっくりと見学。

その後、いつも通り村の大人たちに追いかけまわされていた。もはや恒例行事に近い。

聖域近くの森で、見失ったアルを探す大人たち数人の姿が見える。

——どうだ！？

——いや。こっちにはいなかった。

——くそっ、相変わらず逃げ足の速い奴だ。どこに消えた？

——もうこの辺にはいないかもな……。

「……………」

大人たちの話し声を、アルは暗闇の中で聞いていた。
正確には、地面の下、穴の中で。

しばらくすると諦めたのか場所を変えるのか、足音と話し声が遠くなったのを確認してから、アルは大きく安堵の息を吐いた。

「ふいー。行ったか」

「……そうらしいな」

相槌の声の主は、アルの親友である少年のもの。
その少年も、アルと同じ穴の中にいた。

この穴は幼い頃に彼らが発見し、以来アルも逃げ込む場所としてよく利用させてもらっている、いわば彼らの秘密基地。

地面に対し、ほぼ垂直に掘られた大人1人がどうにか入り込めそうな穴。

入り口には蓋として草の塊が積まれており、周囲の景色と相まって、未だ村の大人たちには見つかっていない。

「……いやあー今日は危なかった。助かったぜ」

「アル……捕まらなくて安心したのはいいんだが、1ついいか？」

「んあ？　なんだ？」

アルの足元からくぐもって発せられる親友の声。どういふ事かという。

「……いいかげん頭の上から降りてくれ」

「あ、悪い悪い」

アルが追跡を逃れるためにこの穴に飛び込んだとき、ちょうど彼も穴の中に入ったところだった。

こういつ時に限ってタイミングがピッタリと合ってしまい、アルの全体重をもって踏みつけられた後頭部。

アルは謝罪しつつ、友人の頭から両足をどけて降りる。

「いやぁーゴメンな？ 急いでたからさ」

「まったく……。眼鏡が割れていないのが不思議なくらいだ」

のそりと起き上がり、アルの方へ顔も向けずに愛用の眼鏡についた汚れを拭き取る。

いたって彼らしい、クールでドライな反応だった。

「いや、ほんとゴメンって。お前もちょうどココに来てたところだって知らなかったんだよ」

「確認してから入れといつも言っているだろう……これで何度目だ。僕の上にお前が落ちてきたのは」

綺麗になった眼鏡を着けなおすと、踏みつけられていた頭髪と衣服に付いた土と草を払い落とした。

アルと10年以上の幼馴染であるこの少年、名を『トーマ』という。

アル達とは異なる地方の血を引いているらしく、島民達の中で唯一である、漆黒の頭髪。

長く伸ばされた後ろ髪は狐の尾のように1本にまとめられ、その背中から腰までを覆い隠す。

彼の内面から溢れ出すような、知的で勉強熱心なイメージをより一層高める眼鏡を常時着用している。

同年代の少年達と比べれば少々上に行く身長。

しかし、その体格は女性のものではないかと思うほど細身で繊細。

男らしさ、力強さといった観点からの評価は低いものになるだろう。

「やれやれ……追っ手はもう行ったようだし、出て行ってもだいじょうぶだろう……じゃあな。僕はもう行くぞ」

そう言っただけ顔も向けずに軽く手を振ると、トーマは足元のたいまつに火を点け、穴の奥へと進んでいく。

この穴は断面的に見ればし字の形となっており、入り口を下りた目の前には細く長い暗闇の地下通路が続いている。

左右と天井の土は木を加工したらしい柱と、丈夫かつ繊細な縫い目の網によって支えられていた。

この通路の先に、トーマが毎日のように訪れている秘密の地下室がある。

「……どうして付いて来る」

振り返らず、トーマはアルに訊ねた。

追いかけていた大人たちがいなくなり、外に戻ると考えていたアルがそうはせず、トーマの後を付いて歩いていたからである。

「ん？　だってヒマだし」

「……僕は忙しいんだ」

「そう言っただけ……あっ、そうだ。トーマに相談したいこともあったしさ」

「……忘れていたということは大した相談事ではないということだな。また今度だ」

「んもー。そんなに怒るなって……調べ物、俺も手伝うからさあ」

「結構だ。邪魔にしなければならない」

「だから踏んだのは悪かったってば……ゴメンってば」

邪険にされても、アルが帰る様子はない。

2人は会話をしながら、たいまつで照らされた地下通路を進んでいく。

やがて彼らは通路の行き止まり、扉の前へとたどり着いた。

この通路の存在自体、アルにトーマ、そしてメルの人以外には知られていないが、トーマは念のため後ろを確認してから扉を開け、部屋の中へと入っていく。

無論、アルもそれに続いて。

秘密基地と相談と 1

この場所はアル達しか知らない、秘密の地下室。

むき出しになっていいる土の壁や天井は部屋と呼ぶには少々原始的過ぎるかもしれないが、それでもここは少年達にとって宝の部屋であつた。

部屋の中心には木作りの大きなテーブル。向かい合い、テーブルを挟むように椅子が2つ置かれ、壁一面に並べられた大きな棚。

そこには大小様々な本がほとんど隙間なく収納されており、本の背表紙を飾る文字もまた、様々な造形のモノが並ぶ。

トーマはテーブルの上に置かれているロウソクにたいまつから火を灯すと、棚から数冊の本をまとめて取り出し、いつものように調べ物を始めた。

一方でアルといえば、トーマの向かいの椅子に腰掛けてあくびをする。

「……帰らないのか」

「だって、ヒマだしさ」

手にした本のページから目を離さずに質問したトーマに、変わらぬ答えを返すアル。

「やれやれ……じゃあさっさと話して、僕を独りに……うおっ！？」

仕方なく本からアルへと視線を向けたトーマが驚愕した。
ロウソクの灯りに照らされたアルの顔を見て、である。

「……なんだ急に。どうかしたのか？」

「ど、どうかしたのはお前だ！　なんなんだその顔は！？」

彼の顔は、まるで集団に袋叩きにでも遭ったかのようにボロボロでアザだらけだった。

しかし当の本人は気付いていなかったのか、トーマに言われてから自分の顔に手をやり、腫れ上がった頬や脛を確認する。

「ああ……痛いとは思ったけど、腫れてたんだな」

「……大人たちにも捕まったのか？」

「んなわけないだろ。そう簡単に捕まんないよ」

トーマの質問に、アルはボロボロながら満面の笑みで返す。

「昨日なんだけど、逃げてる途中でイリヤたちに会って、重そうだったから逃げるついでに洗濯物を家まで届けたんだ。そしたら家に帰ってからメルが来て、んで殴られた」

「……事情がよく分かんが、とりあえずその顔はメルにやられた、と？」

「そーいうこと」

「……相変わらずだな」

島一番の問題児・アルが暴れ、少女でありながら島一番ではないかという腕力のメルが、鉄拳制裁を加える……これはもはや日常風景。

アルは逃げ足こそ勝っていても、ケンカとなればメルに勝ったことはない。

というより、本気のケンカをしても勝てないだろう。相手が少女ということのを抜きにしても。

「まあいい……それで？」

「それで？」

「……相談があるとお前が言っていたんだが」

「おお！ そうだったそうだった」

「……本当に相談したいのかお前は」

相談したいと言っておきながら、トーマに言われるまで忘れていたアルの能天気さというか、いつも通りのマイペースぶりにトーマは軽い頭痛を覚えそうだった。

「もちろんだつて。お前にしか相談できないんだよ」

「……聞くだけは聞いてやる」

「なんだよ……なんか冷たくないか？」

「門前払いされないだけありがたく思え」

「……ぶー」

「ぶうぶう言っていないで早くしろ。今日中にこいつは読み終えたんだ」

トーマはそうつぶやき、開いていた本を閉じてテーブルの端に寄せた。

秘密基地と相談と 2

トーマが連日この場所に通い、引き籠る理由。それは彼が手にしている古書にある。

かつてこの世界が『西暦』^{せいれき}と呼ばれていた、古い時代の歴史。

通称、『古代史』^{こだいし}と呼ばれるその時代の記憶や記録は、ほとんど現存していない。

時代が流れすぎているうえ、数多の技術や記録が、当時の巨大な戦火によって失われてしまったということもある。

何より、古代史の終わりを生きていた人々には、自分たちの今を未来に伝えようなどという余裕がなく、今日という日を生きるのに必死だった。

その間も時は流れ、世界の終わりの記憶も、実際にそれを見た者たちも少しずつ消えていく。

しかし、歴史を紡ぐ事を諦めなかった者もいる。

だから西暦の終わりから数百年が経った今も、こうして古代史について記録された古書の類が、大変希少ではあるが残っている。

アルとトーマが幼少の頃に見つけたこの部屋は保管庫としてつくられたのか、そうした書物が大量に残されていた。

ただし古代と現在では、人々が使っている言語も異なるため、読解には難解な翻訳作業が付いてまわる。

トーマはこの部屋を見つけてから古代史に強い興味を抱き、以来

毎日ここに通い詰めては、独学で古代史について紐解き、学んでいる。

メルがイリヤに自慢していた『人間の代わりに洗濯をしてくれる道具』についても、トーマから聞きかじった知識だった。

「じゃ……じゃあ、相談だ。いいか？ 話すぞ？」

トーマに急かされたアルは、秘密話をするように顔をグイッと近づけ、なんのためか発言の許可を再度求めた。

「……だから、早く話せと言っている」

「その、相談っていうのはだな……」

「ああ」

「……………」

しかし、アルの口からはなかなか発言の一言目が出てこない。その間にもトーマの我慢は限界に近付いていた。

「……調べものに戻るぞ？」

「だあああ悪かった！ ちゃんと話す！ 話すから！」

古書を再び開こうとするトーマにすがりつく。

もう一度顔を向き合わせ、アルは言葉に迷いながら相談を始めた。

「んーと……その……」

しかしアルは、相談を始めた途端、気恥ずかしいとばかりにトーマから視線を逸らす。

「い、イリヤのことなんだけど……さ」

「イリヤの？」

「そ……そう。そうなんだよ……」

いよいよアルの顔は赤く染まり、その身体は完全にトーマとはあさっての方を向いていた。

「い……い、iiiiiiイリヤってさ……その、なんていうか……か、可愛い……よな？」

「ふむ」

この発言とアルの態度から、すでに相談の内容がなんとなく予想はついていたトーマだったが、ここはあえて話に乗ってやることにした。

「まあ……村一番の気で、老若男女問わず評判がいいのも否定しないが」

「だっ、だよな？　そうだよな！？　うんっ！」

「……それで？」

「それで……その……」

「イリヤが可愛いという事と、お前の相談に何の関係がある？」

「う、ん……と」

次の言葉を探して、軽いパニックに陥っているのが彼の後姿から簡単に見て取れた。

「その……あいつ、可愛いし……その……えーっと」

「……好きだとも？」

「ぐはぁっ！」

「……………」

胸に杭でも打ち込まれたかのような勢いでアルが思い切りのけぞる。

「……イリヤの事を考えると、胸が苦しくなる」

「はうっ…！」

「……イリヤの近くに行くと、なぜか緊張する」

「うっうっ…！」

非常に分かり易い、お手本のような反応だった。

秘密基地と相談と 3

「イリヤが夢に出てくると……」

「も、もうやめてくれ……死にそうだから」

胸を押さえ、その場にうずくまって口撃の中止を懇願するアル。

「で、相談事というのはそれか？」

「……そうです」

「まあ、お前がイリヤに好意を寄せているのは前々から分かっているが……」

「え、ええええええええっ！？　なんで分かったんだ！？」

「……お前のイリヤに対する態度を見ていれば余程のバカでない限り分かる」

「そ、そうだったのか……」

（……気付かれてないと思ってたのかコイツは）

「それで、どうするつもりだ？」

どうして発覚したのか懸命に考えているアルに、トーマが切り出した。

「どうするって……」

「というよりお前がどうしたいのか、だ。イリヤが好きだから、どうしたいんだ」

「それが分からないから相談したんだよ……」

「なるほど……」

トーマは少しもズレていない眼鏡を右手の中指で押し上げた。何か考え事をしたりする時に見せる、彼特有の癖である。彼はそのまま両目を閉じ、あごに手を当て無言になった。

アルとは10年以上の付き合いになるが、恋愛事での相談はコレが始めてだ。

彼がかなり前から、イリヤに好意を寄せているのも知っている。おそらく、アルにとってはこれが『初恋』というやつなのだろう。

（若い男女の恋愛……か。以前に古書で読んだことがあったな……）

「トーマ？」

（たしか……39ページの辺りに……）

以前に読破し、内容を記憶した古書。その記憶をたどり、頭の中でその本を思い浮かべてページをめくっていく。

「……思い出したぞ」

「へ？」

トーマはゆっくりと目を開き、再び眼鏡の中心を中指で押し上げた。

「……いいだろう。その相談、乗ってやる」

「えっ……ホントか!？」

「ああ……だが今日はここまで。続きはまた今度だ」

「なんで？　なんか思い付いたんなら、今すぐ教えてくれれば……」

……」

「思い付きはしたが、ちょっとした準備がいる……そうだな、明日の昼過ぎだ」

「えー？　なにするんだよ？」

「悪いようにはしないさ……とにかく詳しいことは明日だ。昼過ぎに『古代の遺産』手前の丘の上で落ち合うぞ」

トーマはそれだけ言うと、この話はもうお終いだと言わんばかりにテーブルの古書を開き、調べ物を再開した。

「なんかスツゲエ気になるけど……仕方ないか」

この場で問題解決の方法が見つかると考えていたのか、アルは少

しだけ落胆した様子で部屋を後にした。

「んじゃトーマ、また明日。よろしくな」

「ああ……」

アルが地下室を出て行き、足音が遠ざかるのを確認してトーマは古書のページを閉じる。

（……行っただか）

古書を棚に片付け、テーブルの上の灯りを消し、彼もまた地下を後にした。

「とりあえず、あいつに会いに行くとするか……」

目的の人物に会うため、トーマはその足を村の方へと向けた。

恋心、女心 1

——翌日の昼。

アルは予定よりも少し早く、トーマとの待ち合わせ場所へと足を運んだ。

彼が友人たちとの待ち合わせによく指定する場所。古代の遺産の手前にある、小さな丘。

近付くことが許されない、聖域と呼ばれる場所とは目と鼻の先だ。小高い丘の上に到着したが、まだトーマの姿はない。

「早すぎたかな……？」

待ち合わせ場所に間違いはないはずなので、のんびりとトーマの到着を待つことにした。

アルは草の上に寝転び、空の見上げる。

そこは、一面の曇。

どれほど時間が経ち、頭上の雲が風に流れても、決して晴れることのない曇天。

覆い隠された太陽の光で雲が白く照らされ、昼と夜の違いこそあれど、それ以外に変化のない景色。

「……………」

アルは寝返りを打った。代わり映えない空を見ていてもつまらない。

視線を動かせば、目に映ったのは古代の遺跡。

それは冷たさを色で表したような、白銀色の巨体。

土台部分は物物しく、しかし空を仰ぐ先端へ向かうにしたがい、その外形は細く、スツキリとしたものになっている。

まっすぐに伸びた先端付近は、まるで槍頭の抜けた槍のようであった。

何のために造られたのか、何に使われたのか知る者のいない、この島に残る古代人たちが残した巨大な建造物。

島の大人たちはこれを遺産と呼び、崇め奉る対象とし、安易に近付いたり触れてはならないとしている。

遺産がそびえ立つあの丘は聖域とされ、特別な日、特別な理由がない限り踏み入ることは許されていない。

丘の頂上付近には遺産を囲む形でバリケードが築かれ、常に数人の大人たちが交代で見張りを立てているほどだ。

それでも遺産への好奇心が抑えきれないアルは、幾度となく聖域に進入しては見つかり、大目玉をくらっているのだが。

「……ん」

背後から足音が聞こえ、アルは起き上がって振り向いた。

「よっ。トーマ」

「待たせたか？」

「待ったけど……アレ見てたらあつという間だったから、別にいいよ」

アルはそう言って、背後の建造物を指差す。

「古代の遺産か……」

「なんか上手く言えないけど、眺めてると不思議なカンジするんだよなー……」

2人は会話を中断してそれを見上げる。

測った事はないが、全長は彼らの身長10倍近くはあろうか。こうして見上げているだけで、得体の知れぬ恐怖と威圧が身を包み、不思議と好奇心が沸き起こる。

「なあトーマ。なんであんなカタチしてるんだろーな？」

「……さあな」

「……釣れない返事だなあ」

「分からないものは仕方ないだろう……信仰の対象ではあるが、実際あれが何なのかを説明できた人間は、この島にはいないんだからな」

「でもさ……前に、『カタチあるものには全て理由がある』ってトーマ言ってただろ？」

「古代書からの受け売りだ……まあ、僕もその通りだとは思うが」

「つてことはさ。あれも、ただ建ってるだけの物じゃないってことか？」

「さあな。古代人たちが、何か目的があって造ったのかもしれないし、実際に何かに使用されていたのかもしれないな……」

トーマは視線を変えず、歩を進めてアルの横に並んだ。

見上げる彼らに向かい風が吹く。

そびえ立つ古代の遺産の側から、丘を通り抜けてくる風は草や木々が風に揺れる音とは違う、どこか神秘的な響音を耳へと運ぶ。

恋心、女心 2

「遺産も含めて、古代史は謎だらけだ……生き証人だって、もうこの世界にはいない」

「……だな」

「唯一の手がかりといえば、あの古代書だけ……だから僕は、いつか古代書を全て解読する……古代史を読み解いてみせる。そうすれば、古代の遺産が何なのか、なぜ造られたのかも分かるはずだからな」

目の前にある古代の遺産を見上げながら、トーマは自らの責務としている、目標を再確認するようにつぶやく。

普段はどこか冷めた印象の強いトーマが、その裏で『古代史』に関して並々ならぬ熱意を抱いていることをアルは知っている。

その凜とした表情を横目に見たアルは、同じ年ながら、彼の方が随分と大人であるような錯覚を覚えた。

「話が逸れたな……今日、ここに来た本題に入ろう」

「お、おお！ き、ききき緊張、緊張するな……」

「……わざわざ口にしなくても、お前がガチガチに緊張しているのは十分伝わってる」

「わ、わわ分かってるさ……ふう」

本題、アルの相談事について話し始める前に、大きく伸びをしてアルは深呼吸をする。

「で？ 昨日言ってた、思いついた事ってのはなんなんだ？」

「ああ。僕が思いついた作戦……というより、お前が取るべきことからの行動なんだがな」

これから語りだそうという意思の表れか、トーマはいつもの眼鏡を中指で押し上げる癖を見せた。

あいかわらず眼鏡は少しもズレていなかったが。

「確認も含めて言うておくが、お前はイリヤのことが好きだ」

「ぐおっ！」

「……この先、毎回その反応をされると話が進まないから耐えろ」

「……努力します」

「それで、お前はイリヤのことが好きなわけだが」

「ぐ」

「……………」

「つ、続けてくれ……」

「……好きだが、今のところどうしたらいいのかわからない、と」

「そーそー」

「なら、やることは1つだな」

「1つ？」

「告白だ」

「こくはく……」

トーマからの助言に、アルはぽかんと口を開けて固まった。

「そう、告白だ。これは古代書からの受け売りなんだが……」

「……なあなあトーマ」

「なんだ？」

「こくはくってなんだ？ 食い物か？」

トーマは盛大にずっこけた。

「い、いいだろう……そこから説明してやる」

「おうっ！」

頭の中身はともかく、気合だけは十分な様子のアルだった。

「いいか、告白というのはだな。男女間において……」

「自分が相手に対して抱いてる好きという気持ちを打ち明けること……でしょ？」

「へっ？」

背後からの突然の声、しかもそれは女の声。

ということは当然、目の前にいるトーマの声ではなく、第三者の声ということ。

恐る恐るアルは振り向き、心臓が口から飛び出すんじゃないかという衝撃を覚えた。

「なっ……なんでお前がここに……!？」

そして、その人物が目映った瞬間、どうして今までその存在に気付けなかったのだらうと、激しく後悔した。

恋心、女心 3

突然の声に振り向いたアルの視界に映った少女。

その少女とは、アルにとってこの島における唯一といっても過言ではない天敵、メルであった。

「お、おおお前……いつからそこに……！」

「……遅かったな。来ないのかと思ったぞ」

「いやぁー悪いわね。ちょっと野暮用があつてさー」

「つてオイ！ 人の話を聞けつての！」

「ああ、はいはい聞いてるわよー。で？ 何よ？」

「だから、なんでお前がここに……！」

「なんでとは失礼ね。他ならぬアルの相談に乗ってあげるためにここまで足を運んであげたっていうのに」

「俺の相談つて……トーマ、もしかして……！？」

現状からいってそれしか考えられないのだが、一応確認の意味を込めてアルはトーマを問い詰めた。

「そうだ。僕がここに呼び出した」

出来れば外れて欲しかった予想通りの答えに、アルは全身が凍りつく感覚を覚えた。

「じゃ、じゃあ……俺がイリヤを好ゴホンゴホン！……その、あの相談も」

「ああ。メルはもう知っている」

「うん。知ってるわよー」

「ぎいやあああああ……！！」

アルは落雷にでも遭ったかのような反応を見せ、操り人形の糸が切れたかのように地面に倒れた。

「い……いったいどうして」

「昨日お前から相談を受けた後にメルにも話してな。こうして来てもらった」

「そんなことは分かってんだよおおおお！！」

直立不動の姿勢で地面に突っ伏していたアルは、これまた電気ショックを与えられたかのようにガバツと顔を上げた。

「問題はあつ！この赤髪の悪魔に俺の相談が知られたっていうぐへっ！？」

後頭部にメルの鉄拳が直撃し、アルは再び地面に突っ伏した。

「だ・れ・が・悪魔だコラ」

「うう……俺は、お前にだけのつもりで、恥ずかしくても相談したのに……」

「……まあ、メルにも相談に乗ってもらうことを秘密にしていたのは悪かったな。許せ」

「ぐすん。もう終わりだ……明日からどんな顔してイリヤに会えば……というか、恥ずかしくてこの島にいらなくなるかも……」

アルはまるでこの世の終わりのようにひたすら嘆いていた。

お喋り好きで、日頃からアルの行動に少なからず迷惑しているメルにこの秘密を知られてしまったては、島中に噂が広まるのはもはや時間の問題だろう。

そんな彼に、赤い髪の悪魔……もとい、メルから天使のような言葉がかけられる。

「いやいや、安心しなさいって。アンタの相談内容、まだ誰にも言っていないから。もちろんイリヤにも」

「え……ほ、ホントか？ 本当に本当なのか！？」

「もちろん、ま・だ・言っていないだけだねー」

「……………」

彼女に感謝しようかという気持ちが芽生えかけていたアルの心は、再び無残に打ち砕かれた。

「冗談よじょーだん。言わないって」

「もういいよ。好きにしてくれよ……俺は帰って、旅に出る準備をするから……」

「言わないってば。大丈夫だって。力になってあげようと思って、わざわざここに来てるんだから」

「……なあトーマ。信用していいと思うか？」

「アタシの言葉で素直に信じなさいよね……」

恋心、女心 4

「たしかに、メルの中から信じろと言われても、信用が無いから……」

「うん。無い」

アルもトーマの意見に同調し、キツパリハッキリと言いつた。

(コイツら……)

「……まあ、お前を島の笑い話にしようという気はない。メルに話したのは、彼女の力も必要になるだろうと思ったからだ」

「メルのちから……なんかぶっ壊すのか？」

「あ？ とりあえずアンタのそのカラッポ頭を叩き壊してあげようか？」

「そういう意味での力じゃない……考えてみる。この悩み、僕とお前の2人だけでなんとかなれると思うか？」

「うーん……」

「恋愛というものは、男だけの考えだとあらぬ方向に行ってしまうことが多い……らしいからな。身近な人物で、性別的に一応は女ということで、メルにも協力を頼んだんだ」

「アタシはれっきとした女だっつーの」

「島一番の怪力馬鹿がよく言う……あだっ!？」

「幸い、メルはこういう話題にはかなり興味津々な様子だったかな。女側の思考が分かる協力者ということで……」

「そこで、このメル様に白髪の矢が立ったというワケよ」

「……正しくは白羽の矢だな」

「細かいコトはいーの。じゃあとりあえず、アル！ 始めるわよ！」

「なにを？」

「決まってるでしょ。講義よ、講義」

「コウギ？」

「そ。勉強会ね……名付けて、『メル先生の恋愛講座!』ってトコかしらねー。ハイ、座って座って」

メルはすっかり講師気取りなのか、拾ってきたらしい木の細枝を手にも、アルに足元への着席を促す。

言われたとおりにアルが草の上に腰を下ろし、メルの講義とやらが始まった。

「んじゃ、始めるわよー」

「おーっ」

元氣よく返事をする生徒役のアル。その横には、不服といった表情でトーマが座らせられていた。

「……なんで僕まで」

「はい、じゃあアル君。さっそく問題ですが恋愛とはなんでしょうっ。」

トーマの小声での抗議は、華麗にスルーされた。

「んー……よく分からないけど、誰かを好きになること」

「まあいいでしょう。一応は恋愛の中に含まれてるしね。」

「違うのか？」

「いい？ 『恋』と『愛』が揃って、恋愛よ。恋っていうのは一方的なもの。相手のことが好きで、一緒にいたいって思う気持ち。愛っていうのは相手につくしてあげたり、大切に想う気持ち」

「ふむ」

「で、今のアンタの状態は、イリヤに対しての好きという一方的なもの……つまり、恋ね」

「ふむふむ」

「で、この恋をどうやって恋愛にするかだけど……その最終手段が、告白ってワケ」

「えーっと……コクハクっていうのは……」

「さつきも言ったけど、『男女の間において、相手に対して好きだという気持ちを打ち明けること』よ。分かりやすく言えば、『私はあなたが好きです』って、相手に伝えるっていうこと」

「ふーん……」

「ま、言えばお終いつてワケじゃなくて、当然言われた相手にだって選ぶ権利はあるから、断ることは出来るのね。そこで相手もオケーすれば成功。晴れて恋は恋愛になり、愛し合う2人は『恋人』となるってワケ」

「コイビトかあ……」

「恋人となった後は、お互いの仲を深め合うの。友達としてでなく、恋人として、男女として。そして最終的には……」

「コイビトかあ……」

「……ふんっ！」

「ぐふっ！」

メルの右拳がアルの顔面にめり込み、彼は衝撃で後方に転がる。血の気の多い講師だった。

恋心、女心 5

「ぐ……イチチ」

「講義はちゃんと聴く！ 恋人って単語で色々妄想する気持ちは分かるけど、集中！」

「は、はい」

「やれやれ……ずいぶんと暴力的な講師だがはっ！？」

小声でつぶやいたトーマの脳天にもげんこつが見舞われる。

「抗議中の私語禁止ね。容赦なく鉄拳制裁するから」

「だ……だからなんで僕まで生徒側でぐっ！？」

2発目。先ほどよりも強烈な鉄槌だった。

「メル……あ、いや……先生？ とりあえず続きをたの……お願いします」

「よろしいっ」

先生という呼ばれ方に満足したらしいメルは、上機嫌で講義を再開した。

「まあとりあえず、相手に想いを伝えるまでは恋。相手が受け入

れてくれて、お互いに愛し合うと恋愛となり、恋人と呼ばれるわ。
その後の展開次第だけど、最終的には結婚がゴールってカンジね」

「ほほお……」

「で、とりあえずアンタが目指さなきゃいけないのは告白の成功
よ。そしてそのためには、『女心』というやつを知る必要があるわ」

「オンナゴコロ？」

「……平たく言えば女性特有の心理、気持ちだな」

「アンタらにとつちや無縁なモノだろうけどね。例えばアル……
アンタがもし！ もしもよ？ もし、イリヤから突然プレゼントを
もらえたとして、それがアンタがトイレに入ってる最中だったら、
どんな気持ち？」

「……ヒドイ例えだな」

「ん……んー？ 嬉しいけど、違う時にしてほしい」

「でしょう？ まあ、今のは例えが悪かったかもだけど、アンタ
が告白する時に気をつけるべきところよ。『愛を語るには、時と場
所を選ぶ！ そして相手の気持ちを汲み取る！』」

拳を握り締め、目の奥に恋愛を語る炎を灯し、メルは力強く言い
切った。

「コレ、告白もとい恋愛における重要ポイントね。書いて覚えと
きなさい」

「トーマ。書く物がない」

「……頭の中にでもメモしておけ」

「んで告白するにあたって、時と場所を選ぶのも、相手の気持ちを汲み取るのにも、女心を知ってるというのは重要なワケよ。わかる？」

「わかりませ……ぐえっ!？」

アルは元気いっぱいに答え、そして叩かれた。

「……回答出来ないからといって殴るのはどうかと思うんだがな」

「何か言ったかしら? トーマ君」

「べつに……続けてくれ」

「ではでは。ここでいう女心っていうのは、『イリヤの気持ち』と考えて」

「おう」

「あの娘の気持ちを知ること、イリヤの望む形……すなわち、時と場所、そしてどんな言葉で告白すればいいかが分かる。対策を立てられる……ってことはつまり?」

「つまり?」

「アンタの告白が成功する確率が、それだけ高くなるってことよ」

「おお……なんかよく分かんないけど、スゴそうだ!」

ある意味予想通りの反応に、メルとトーマはため息をついた。

「……コイツに難しいやり方は合わないんじゃないか?」

「ん?」

「そうねえ……アンタの場合、ストレートに好きだって言った方が良さそうね」

「?」

「ま、そういうことはヌキにしても、イリヤが懂れているような告白が出来れば御の字じゃない?」

「うーん……」

アルは真剣に思考してみたが、彼女が懂れている告白とはどんなものなのか想像出来ない。

というより改めて考えると、彼女について知らないことは結構ある。

好きな場所、好きな時間、季節、言葉……毎日のように会っているとはいえ、彼女への好意の裏返しである恥ずかしさから、知らぬ間に会話の中でも壁を作ってしまったのが原因だった。

恋心、女心 6

「うーん……イリヤの憧れてる……告白」

目を閉じ、腕組をし、身体ごと捻ってみても妙案が思いつかない。

「仕方ないわねえ……そんな悩めるバカ猫ちゃんに、メル先生からのアドバイスよっ」

「ん？」

メルは胸の前で両手を組み、両の瞳をキラキラと輝かせながら答えた。

「女の子っていうのはね……マロンチックな恋愛に憧れるものなのよ」

「マロンか……俺も好きだぞ。甘くてウマイし」

「……正しくはロマンチックな」

「そーそー。それぞれ」

「……マロンと何が違うんだ？」

「ぜんっぜん違うわ。例えるならイリヤのパンツと村長のパンツぐらい違うわ」

「……違うなあ」

「……どうでもいいがそのいちいちヒドイ例えはなんとかならぬのか」

「話を戻すと、ロマンチックっていうのは……はい。トーマよろしく」

「そこで僕に振るのか……ロマンチックというのは、古代書に表記されていた言葉だ」

「どういう意味なんだ？」

「簡単に言えば、現実的でないことだ。古代書に載っていた『シンデレラ』という話は前に聞かせたことがあるだろう？」

「うんうん。覚えてる」

「ああいった、現実ではなかなか起こり得ない事。情緒的で、空想的。夢のような理想的な状況のことだな」

「うーん……ロマンチック……」

「理解できるかしら？」

「よく分かんないけど……なんだ。俺がガラスの靴を用意すればいいのか？」

ある意味、彼らしい結論に2人は再び深いため息をついた。

「そういつことじゃなくてだな……」

「シンデレラの話は、1つの例え。要するに女の子は、そういうおとぎ話のような、理想の恋愛に憧れてるってコトよ」

「……なるほど」

「さて、ここでアルに質問。イリヤの憧れてる恋愛はどんなもの？」

「え……」

指を突きつけられ、質問されてもアルにはその答えなどさっぱり思い浮かばない。そもそも、本人すら恋愛については超初心者なのだから当然か。

「えーっと」

「……思い浮かばない？」

「おう！ さっぱり！」

「そこを威張らない」

「……だがこれで、次に取るべき行動がハッキリしたな」

「そうね」

「え？ そうなのか？」

アルだけはまったく分かっていない様子で、きょとんとしていた。そんな彼の肩に、メルが手を置いて語りだす。

「じゃあアル。アンタに宿題を出すわ」

「しゅくだい？」

「そ。アンタが次にこなすべき課題よ。『イリヤと2人きりで話をする』……コレね」

「い……っ!？」

「出来るわよね？ 出来るでしょ？ っていうか、やりなさい」

「いやその……2人きりっていうのは……その、恥ずかし」

「余計な恥は捨てる」

「うう……」

普段は前向きで猪突猛進な彼にとっては珍しく、えらく後ろ向きな威勢である。

「あのね。何もいきなり告白しろって言ってんじやないのよ？ ただの会話よ会話。意識せず、自然に話すればいいのよ」

「そうは言っても……」

アルはどうしても乗り気になれない。

片想いの時期によくある、相手への恥じらいと恐怖心であった。

「……アンタこのままじゃ、イリヤに会うたびにオドオドして緊張して、一生まともに話せないわよ？ それでもいいの？」

「それは……嫌だけど」

「2人きりになると話も出来ないような人間に、告白なんか出来ないわよ？ ハッキリ言って、告白して断られるよりもずっと、うん。比べられないほど情けないと思わない？」

「う……」

「とりあえず少しでもいいから話をしてみなさいな。そこで上手くいけば、さりげなくイリヤの好きな場所とかを聞いてみればいいのよ」

「う、うん……」

彼女の言葉に、アルは少しずつ背中を推され始めていた。

恋心、女心 7

「……そうだな。まずは行動してみるべきだ。困ったことがあれば、メルに相談するといい」

「何言ってるの。そうなら当然、アンタも相談に乗るのよ」

「古代書の解読が遅れる……」

やれやれとつぶやきながら眼鏡を押し上げるトーマも、まんざらではない様子である。

「とにかく、男でしょアンタ。だったら喧嘩上等、当たって砕けるよ。そんで何かあったら、またこの3人で話し合えばいいでしょう?」

「メル……」

2人の励ましに、アルは軽い感動を覚えた。

「サンキューな……島一番の猛獣女に、古代史バカだと思ってたけど、やっぱりお前らいいヤツだよ」

「……あ?」

「うん……やる! 俺、やってみるよ! 2人とも、ありがとな!」

メルの鉄拳が飛ぶよりも早く、奮起したアルはその場を走り去って行った。

「あ、ちよっ……誰が猛獣だゴラアアアアッ！」

「……叫ぶのはいいが他所でやってくれ。耳鳴りがする」

「うるっさいわよこの古代史バカッ！」

「お前まで言うか……」

そんなやり取りをしている間に、村へと走るアルの影はどんどんと小さくなり、ついには見えなくなる。相変わらずの走力であった。

「……まあ、ここでアンタと喧嘩してたってしょうがないわね。さっそく動くとしますか」

「……何か考えがあるのか？」

「もちろん。いくら周りかはっぱかけたって、アルだけじゃなかなか上手いこと行くわけないのは目に見えてるし……アタシらが色々と仕込んでやらないとね」

「それじゃあ僕は古代書の解読に戻……」

「アタシらって言ったでしょ……？一緒に来なさい。アンタにもやって欲しい作戦はあるんだから」

ひっそりとその場を去ろうとした彼の襟首を片手で掴み、ご機嫌な様子で引きずっていく。

当然ながら、トーマには拒否権など許されない。

「僕の日課がどんどん崩されていく……」

「別に明日すぐに死ぬわけじゃないでしょ。文句言わない」

2人もまた、トーマが通った道を歩き、彼らの村へと戻って行く。

——約1時間後。

場所は村のはずれ、アルの家にて。

「……うーん」

人々の行き交う足音、笑い合う話し声、活気溢れる市場での掛け声が、家の中でも微かに聞こえている。

トーマとメルが村に着くより一足も二足も早く、アルは村に到着し、自宅へと戻っていた。

そして現在は自室に籠り、似合わない正座をしつつ唸っている最中であつた。

「むむう……」

彼は悩んでいた。滅多に使わない頭をフル回転させ、大いに悩んでいた。

先ほどの3人での作戦会議、もとい話し合いで『イリヤと会話をする。可能ならば、彼女の好きな場所などの情報を引き出す』とい

う、当面の目標は決定した。

決定はしたのだが。

「んんー……」

まさにそのことで彼は頭を悩ませていた。

イリヤのことを異性として意識していなかった頃は、ごく普通に会話が出来ていたと思う。

しかし最近は、彼女を前にすると緊張し、言葉に詰まり、その場から逃げ出したい衝動に駆られてしまうのだ。

ついさっきも、家に戻る途中で偶然彼女と顔を合わせた。

しかし、とつさに言葉が浮かばず、会話を始める前に「村長に呼ばれているから」と向こうから切り上げられ、やむなく別れてしまったばかり。

（「話でもしようぜ」って呼び出しに行けばいいのか……？ いや、でも。2人つきりになったとして、どんな話をすれば……）

変に意識し始めると、会話をするというのは難しい。

下手なことを口走って、彼女に幻滅されるというのは出来れば避けたいし、これといった話題も今のところはまったく思いつかない。

「……よしっー」

ここでアルは、1つの決断を下した。

「とりあえずメシにしようー」

普段使い慣れない頭を使うと、かなりのエネルギーが消費されるものである。

色恋沙汰も大事だが、食い気も大事な年頃であった。

奇跡を見た者

「すみません。遅くなりました……」

イリヤは扉を開けつつ謝罪の言葉を口にし、室内に入るなり頭を下げた。

部屋の奥に置かれているソファーには、この家の主である村長が、いつもと同じ場所、杖を片手に腰掛けていた。

「ふおっふお……いいんじゃよ。突然呼び出して悪かったの」

いつもと変わらぬシワだらけの穏やかな笑顔。
叱責の1つでもあるかと思ったが、どうやら怒っている訳ではなさそうだ。

「……失礼します」

後ろ手に扉を閉めてから、イリヤは村長とテーブルを間に向かい合う形でソファーに腰を下ろす。

「……どうかな？ 『^{サイ}祭』の準備は」

「あ、えっと……特に問題は無いみたいです。みんな頑張ってますから」

「それはええ。なにせ5年に1度じゃ……間に合わないという訳にはいかんからのう」

「そうですね……もうすぐですから」

『サイ祭』。

この島で5年に1度だけ行われる、式典の呼び名である。

西暦が終わりを迎えた数百年前。

世界を包んだ戦火によって、空を厚い雲が覆い隠すようになった。

昼と夜の明るさの違いこそあれど、隙間無く漂う曇によって、太陽の陽が差し込んだり月と星が瞬く空……『星空』を見上げる事は現在でもかなわない。

もとより、地上からでは人の手が届かぬ空である。

戦火によって文明のほとんどを失った人類に、もう1度雲の向こうの空を眺める方法はなかった。

そして人類が星空を失ったのと同時期に、この島では5年毎に祭という名の祈りの式典が行われるようになった。

もう1度人々が星空を眺められる日を願って貢物を用意し、祝い、天へと祈るのである。

「さてさて……今回の祭は、どうなるかのう」

「私も、もう一度あの空が見れ……あつ。す、すみません」

「いやいや。ワシは気にしておらんよ」

「……………」

「……口にはしなくなったが、まだ信じてはいるのじゃな」

「……はい」

西暦の終わりに今日まで雲は晴れず、祭を何度行おうと空がそれに応えることは無かった。

しかし、今から10年前。祭の日でもなく、いつもと変わらない夜のこと。

イリヤは偶然にも、その奇跡を目撃してしまった。

数百年ものあいだ、空を覆い隠していた雲に、ほんの少しの切れ目が生じた。

そしてたしかに雲の向こうには、伝承のおとぎ話にしか過ぎなかった星空があったのだ。

その日その夜、その奇跡を目撃したのは、この島ではイリヤと、彼女の両親だけ。

当然、イリヤはその目で見た奇跡を、島の大人達にも話した。

しかし、大人達のほとんどは、証拠もない幼い彼女の話を信じようとはしなかった。

ありふれた普通の日の夜に、そんな奇跡が起きるはずが無い、と寝ぼけて夢でも見たのだらうと嘲られ、不謹慎な嘘をついていると陰口を叩かれたりもした。

彼女がどれほど食い下がって語ろうが、それは変わらなかった。

だからいつしか彼女は、その奇跡を胸の中にしまい込み、声に出すことはなくなった。

一方で、彼女の証言は信憑性が低い噂話としては島中に広まり、彼女の体験は島の奇跡とされ、祭の時期になると密かに人々の間で語られることがある。

「私はまだ小さかったけど、あの夜のことは忘れられません……それに」

島の奇跡で、星空が顔を覗かせたのは時間にすればほんの数分であろつ。

すでに皆が寝静まった後のであつたこと、雲の切れ目が小さかつたのもあつて、島民たちの中でもそれを目撃できたのはイリヤと、イリヤの両親だけ。

「それに……お父さんやお母さんと見た……大切な思い出です」

「……ふむ」

イリヤの両親は、彼女と共に奇跡を目撃してすぐ、幼い彼女を残して帰らぬ人となつてしまった。

この島の生まれではないイリヤは、他に身を寄せる親族も島にはおらず、現在まで島唯一の孤児院で生活してきた。

それでも彼女は誰を恨むことも、歪むことなく育ち、その優しさと親しみやすさから、今では島の誰からも好かれる少女となつたのだ。

「お前さんのことはよく知つとるつもりじゃよ。両親に連れられ、この島に來た日から見とるからのう。じゃから……ワシにはお前さ

んが嘘をつくような娘だとはどうしても思えん」

「……………」

「しかし……島の者達にお前さんの話を信じろと言うのも難しい
奇跡を見たのが今ではお前さんだけ。証明しようにも……の？」

「……いいんです。私の話を信じようとしてくれた人もいました
から……証拠なんて出せないから、私にはそれ以上どうすることも
出来ないですけど」

「……………」

「……村長？」

「む……すまんすまん。ちと考え事をな」

村長が咳払いを1つ。それが終わると、本題に入ると言わんばかりに姿勢を直した。

途端、そこまで厳しいものではないが、部屋の雰囲気もやや緊張感を含んだものへと変わった。

「実はお前さん呼びつけたのはのう……今度の祭についてなん
じゃが」

「祭……の？」

「うむ。その、なんじゃ。こんな話を、お前さんにするというのが
も気が引けるんじゃないが……島の大人達の話し合いで決まってるな」

村長は言葉を選びながら、心苦しいといった表情で、その言葉を口にした。

「お前さん……『祈りの神子^{いのみこ}』について、知っておるか？」

呼び出しの手紙 1

「……ねむい」

重たいまぶたを擦りながらアルは起床し、玄関へと向かう。

時刻は、昼より少し前。

島民たちの生活リズムからすればかなりの朝寝坊であったが、それも仕方ない。

なにせ彼は昨夜ほとんど眠れていないのである。

それもこれも、イリヤと会話をするという目標兼悩みのためであった。

眠い目をこすり、あごの骨が外れそうなほどの大あくびをかまし、つつ玄関先のポストの中を覗き込む。

「ん………？」

一応日課で確認しているとはいえ、いつもポストの中は空っぽなのがほとんどだが、今日は珍しいことに手紙らしき物がそこにあった。

「……なんだコレ」

手紙とはいっても差出人の名前は無く、紙を2つに折っただけの粗末な物。

（こんなことするのは……トーマかメルか？ あ、でもこれは……）

広げてみると、およそ読む人間の苦労など考えていないであろうミミズが走ったような……はつきり言えば、とんでもなく汚い文字が羅列されていた。

書かれている文字の総量が少ないのがせめてもの救いだらう。

「この字はメルか……相変わらずひどい字だなあ。これじゃ暗号だっつーの」

書かれている文字を指でなぞってみたり手紙の角度を変えてみたりしながら、なんとかその暗号もといて手紙の内容が判明した。

「えーっと……今日の昼過ぎ、昨日話し合いをした古代の遺産横の丘まで来なさい……？」

文字の酷さはさておき、内容は呼び出し状だった。

そして手紙の内容を解読し終わるとほぼ同時に、昼になったことを告げる村の鐘の音が響く。

指定の時間までにあの場所まで行くととなると、走って向かうにしても今から出発しなければおそらく間に合わないだろう。

「はあ。しょーがない……帰ってからにするか」

せめてもう少し早く起きられれば食事を済ませてから悠々と出掛けられたのに、とアルは肩を落とした。

幸い、目覚めた直後で脳が空腹を感知していないらしい。

行つて話をして、帰ってくる間くらいはなんとかなるだろうと計算し、アルは呼び出しの手紙を片手に昨日の場所へと向かった。

それから走ること十数分。

アルは軽く息を弾ませながら遺産横の、丘の上へと到着した。だが辺りを見回しても、そこに呼び出した本人の姿はなかった。

（急がなくてもよかったかな……）

アルは一息ついて草の上に腰を下ろし、そのまま仰向けに寝ころんだ。

頭上の白い雲はいつも何も変わらず、途切れることなく風に乘つて流れている。

眺め続けていても数分で飽きてしまふ代わり映えない風景。彼はいつも通り横向きに姿勢を変え、空と交わる線まで果てなく伸びる海を眺め始めた。

波間から見える魚群でも狙っているのか、白い鳥の群れが同じ場所を何度も旋回しながら上昇と下降を繰り返している。

無論なにを言っているのかは分からないが、仲間たちとの会話なのか甲高い鳴き声がこちらにまで聞こえてくる。

（…… 1匹くらいこっちに魚運んでくれないかな）

届くわけがない念を鳥たちに送っていると、彼の腹部から空腹を知らせる鈍い音が発生した。

「…… ハラ減ったあ」

やはり起床してから胃に何も入れず、全力疾走をするべきではなかったとアルは軽く後悔した。

今からでは家まで引き返す余裕はないし、森の中で木の実でもつまむにしろ、ここからでは待ち合わせの時間を考えると行来の余裕はなさそうである。

慰めで空っぽの腹をさすってみるが、空腹の音が寂しそうに主張を続けるだけであつた。

「メル……早く来てくれえ」

少々オーバーかもしれないが、飢えによる死期すら悟りかけたとき、草を踏みしめてこちらに近づいてくる足音が聞こえた。

アルは文句の1つでも浴びせてやろうと、起き上がりざま背後から近づいてきた人影に声をかける。

「メルう……呼び出しといて遅いぞ。もう俺、腹と背中がくつききそうで……っ!？」

しかし彼は、目の前の人物を確認すると驚愕した。それはもう、口から五臓六腑が軽々と飛び出そうなほどに。

「あれ？ アル……？」

メルだろうと思い込んでいた来訪者は、あろうことがイリヤであつた。

彼女もまた、なぜアルがここにいるのか分からないという様子で、きよんとしている。

「い、いいイリヤ……っ!？」

この状況は、彼が予想していた展開の遙か斜め上を行っていた。
慌てふためき、何度か舌と唇を噛みながらも、彼は抱いた疑問を
言葉にする。

「あ、あの。その……その、なんでイリヤがここに……？」

「私？ えつとね。朝起きたら、トーマからだと思っただけど手
紙が届いてて……っと、これなんだけど」

そう言ってイリヤは服のポケットから紙切れを取り出す。

アルはそれを手にとって見せてもらうが、内容は彼が貰った物と
ほぼ同じく、この場所へこの時間での呼び出しを伝える手紙であっ
た。

（これは……トーマの字だな）

唯一の違いがあるとすれば、それぞれの手紙を書いた人物が絶対
に同一人物ではないと断言できるところだろう。

片方は大人が書いた字という印象を受ける、形の整った美しい字
が並んでいる。

もう片方の手紙、アルが受け取った方は言わずもがな、紙の上で
ミミズの行進状態であった。

呼び出しの手紙 2

「でも……」

イリヤは手紙を手に、キョロキョロと辺りを見回す。

「トーマいないね……アルは何か聞いてる？」

「いや。全つ然」

2人をここに呼び出した本人たちが現れる気配は、今のところ皆無であつた。

「じつは俺も、同じようにメルから呼び出されてさ……」

アルもポケットから手紙を取り出し、イリヤに見せる。

「……ホントだ。イリヤの字だね」

「うん。急に呼び出して、何なんだろうな？」

「何なんだろうねえ？ 肝心の2人は来てないし……」

「……っ！」

穏やかな雰囲気の中で言葉を交わしていた2人であつたが、唐突にアルが顔を真っ赤にしてイリヤに背を向けた。

「アル？ どうしたの？」

「うえっ！？ にゃ、なにが？」

「なんか急にあさつての方を向いちゃって……」

「い……いやいやい！ なんでもないヨ！？」

「……？」

アルは動揺していることが感付かれないよう、必死に取り繕うが、余計に不審だった。

何を急に慌てているのかというと、アルは今、重大な事実気付いてしまったからである。

（俺……イリヤと会話してる……！）

今更といった感じだが、アルにしてみれば無意識に行っていたことを自覚した瞬間である。

それはもう恥ずかしくて顔から火が出るような錯覚を覚えた。穴があつたら中に入り、上から蓋をして欲しいほどに。

（ま……まさか……！）

ついでにアルはもう一つの事にも気付いた。こちらは彼の中での推測であるが。

（トーマにメルをやつ……俺とイリヤが2人っきりで話が出るように、手紙を……？）

長年の付き合いである。

アルの性格も、彼がイリヤと2人つきりで会話など、いくら決心したからといってそう簡単に事が進むはずがないということくらい、トーマたちにはお見通しであろう。

そこで多少強引な方法ではあったが、トーマとメルは彼らを互いに手紙で呼び出すことで、無理矢理にでもアルとイリヤだけの状況を作り出したのだと思われる。

（ありがとう！ 2人とも……！）

アルはこの状況を察し、心の涙をこっそりと流していた。
もつとも、この後どう転がるかはアルの努力、もとい度胸次第と
いったところだが。

（そ……そうと決まれば会話だ会話！）

「……アル？」

（とりあえずイリヤと会話……出来れば、好きな場所とかも聞き出すんだっとな……！）

「……アルー？」

（つて言っても……どうやってそういう話にすればいいんだ……
？ いきなり聞いてみるか？ いや……）

「アルうー？ おーい……」

（いや、いいんだ。おちつけ俺！ さっきまで普通に話してたん

だ。なんかなる……はず！)

「もう……アルってば！」

「うおっ!？」

イリヤに耳元で叫ばれ、アルはようやく精神の世界から帰還した。

「あ……ごめん。声、大きかった？」

「い、いや。だい……じょうぶだけど……なに？」

本当は片耳がキンキンと響いていたが、やせ我慢した。

好意を寄せている相手を前にすると、人は少し強くなれるものがある。

「んもう、それはこっちが聞きたいよお。アルってば急にそっぽ向いたり、ブツブツつぶやいたり……」

「あ……ゴメン」

軽い瞑想状態に入っていたので自覚していなかったが、どうやら少しは声に出してしまっていたらしい。

(聴かれてはいないみたいだけど……気を付けないと)

「……あれ？」

「へ？ なに……が!？」

アルはまたしても心臓が止まりそうになった。

イリヤが突然すつとんきょうな声をあげたかと思うと、遠慮なくグイっとこちらの顔を覗き込んできたのだ。

もちろん、彼女との顔の距離に比例して、アルの頬は熱を帯びていく。

「え……あ……！？」

「ふむー……えいつ」

「……っ！？」

突然の出来事だった。

こちらの顔を至近距離で凝視したかと思うと、彼女のまるで絹のように繊細で柔らかな手のひらが、アルの額にピトッとあてられたのである。

「……ふむふむ」

「——っ！？」

イリヤが、自分に触れているー！。

そのことを頭が理解し終える前に、身体の方が状況を把握したらしい。

アルは両手足をバタバタと滅茶苦茶に動かし、さながらひるがえって逃げる猫のように、瞬時にイリヤから数メートルの距離を取った。

「やつぱり……」

もしも彼女が狙ってやっているとしたら、なんてえげつなく、嬉
恥ずかしい攻撃か。

すでにアルの顔はリンゴのように赤く、暖炉のように熱くなって
いた。もはや爆発寸前である。

「……アル？」

「は！？ はひっ！？」

既に舌すらまともに回っていない。

しかし、ペース乱されまくりのアルに対して、イリヤは相変わら
ずのマイペースぶりを存分に発揮していく。

「もしかして具合悪いの？」

「……へ？」

イリヤとの会話は先が予想できないと、彼女の周りの人間はよく
言う。

あくまで喩えだが、ジャンケンで何を出してくるのかと予想して
いたら、足を出してきたとか……分かりにくい喩えかもしれないが、
まあそういう感じだ。

「顔がなんか赤いし、すっごく熱かったよ。カゼ気味なの？」

「……………」

顔が赤くなっているのはあなたというせいだし、すっごく熱くな
ったのは、あなたが急に顔を近づけて来たからです……とアルは口
にしかなかったが、飲み込んだ。

「い、いや！　ぜ……全っ然！？　この通りピンピンしてるし！」

「大丈夫ならいいけど……具合が悪いなら、無理しちゃダメだよ？」

「……はい」

まるで姉弟のような内容。2人の会話は、そこで止まってしまった。

草花を撫でる風の音だけが、虚しく響いている。

呼び出しの手紙 3

お互いに声をかけない、無言の時間が過ぎていく。

それはほんの数分であつたかもしれないが、当のアルにはその何倍にも感じられた。

もちろん、何か話さなければという意識はあつたが、次に口にするべき言葉が出てこない。

（まいった……どうすりゃいいんだろう）

「あつ……船だあ」

海の方を眺めていたイリヤが、目に入つたものを何気なくつぶやく。

彼女の視線の先を辿ると、たしかに遙か向こうからこの島に向かって来ているらしい、木造の帆船が目に入った。

今まで何度も目にしている船だ。おそらく今回も、島への交易のためにはるばるやって来たのだろう。

（……これだ！）

海と船を眺めていると、アルの頭に妙案が閃いた。

その瞬間だけは「海さんありがとう。船さんありがとう」と、感謝の言葉を心の中で述べた。

「な……なあ、イリヤ？」

「なあに？」

もはや彼女の顔を直視するのすら厳しかったのだが、なんとか自分を奮い立たせ、顔を背けないようにして声をかけた。

「その……しばらく海でも見てないか？ ……なんて」

「……？ 今、見てるよ？」

「あつ、はい……」

（しくじったあああああぁぁっ！）

普段の彼ならば絶対に口にしないであろうキザな台詞であったが、彼女にはまったく効果がなかったどころか、自爆という結果である。

恥ずかしさと、八方塞がりな雰囲気からすぐにでもその場を逃げ出したい衝動に駆られる。

それでもアルはさらに自分を奮い立たせ、その場に留まって次の言葉を必死に探していた。

というのも、ここで逃げてしまっただけは何も変わらない。

そして、自分だけでは到底作れなかったであろう、イリヤとの2人きりの時間という現状を作り出してくれたメルとトーマ。

親友の2人に対して、こんなところで自ら諦めてしまっただけは申し訳が立たないと思ったからである。

（おちけつ……違う！ 落ち着け俺！）

「その、そうなんだけど……どうせ見るなら、座ってみたら？」

って思ってたさ……トーマたちもまだ来ないみたいだし」

イリヤがずっと立っているのを見て、深く考えずとっさに思いついた文句であったが、彼にしては珍しくその場の空気を読んだ声かけであった。

「うーん……そうだね。じゃあ、遠慮なく」

座っているアルの横に、イリヤも腰を下ろす。

互いの距離は手を伸ばせば届くという自然な、かつベストな位置関係である。もちろん狙ったものではなかったが。

とりあえずイリヤとの会話を引き延ばし、気まずい雰囲気を脱することには成功したようである。

アルは胸の中でガッツポーズをした。

もちろん、横を向けばイリヤの顔がすぐそこにあるという状況は尋常ではないほど緊張するが、ここまできたら耐えるしかなかった。

「……あれって、いつもの船だよな？」

アルは緊張が表に出ないように必死に冷静さを装いながら、イリヤに話しかける。

土壇場で力が発揮されたのか、自分でも驚くほど自然に話しかけることが出来たと感じた。

「うん。いつもの商船だと思うよ」

この島と取引をしている船は、いつも海の方……この島からでは見えないほど遠くの国からやって来る。大きな船体に、大量の品物を積んで。

肉や野菜に穀物などの食料、この島では採れない香辛料や、珍し

いお酒。

はたまた、海の方この国の衣類や、子どもが喜ぶ甘いお菓子におもちゃまで取り扱っている。

海の方この国との交易が始まったおかげでこの島は昔に比べれば豊かになったらしいが、それはまだアルたちが生まれる前の、遠い昔の話らしい。

「……この前来たばかりじゃなかったっけ？」

「うーん……あ、ほら。もうすぐ祭^{サイ}があるから、きっとそれに向けてだよ」

ああなるほど。とアルは納得した。なにしろ祭は、この島の住人たちにとって一大事なのである。

5年に1度しか行われないということもあり、その日は島中の人間が総出で参加し、他のことは忘れ、夜通しで飲んで歌って騒ぐ。

ただしアル自身は、この式典の終わりまで参加し通したことは1度もなかった。

彼にとって初めての祭は0歳の時。参加したかどうかという記憶すらない。

前回の祭の時は既に物心ついてはいたが、この時参加した『祭』に関しては、途中からの記憶が吹き飛んでいた。

「アル……今年はお酒、飲んじゃダメだよ？」

イリヤは前回のアルの姿を思い出し、笑いながら忠告する。

「あ……あれはメルがいけないんだって」

前回の祭、その宴の途中で、アルは突然目を回して倒れた。かき込んでいた食べ物喉に詰まり、飲み物を欲していた彼に、メルから強烈なアルコール度数を誇る酒が手渡されたのである。窒息寸前だった彼は確認もせず無我夢中でその酒を一気飲みし、そのまま気を失ってしまった。

イリヤたちが家まで運んでくれたらしいが、もちろんその時の記憶はない。

メルの仕掛けたとんでもないイタズラのおかげで、翌日の昼に目覚めた時、すでに祭は終わってしまっていた。そのうえ、ひどい二日酔いに悩まされる羽目になった。

「あれはひどかったぜ……頭痛いし、気持ち悪くて目はまわるし、いつのまにか祭は終わってるし」

当時を思い出し、アルは軽く身震いした。

（そっか……アル、祭を最後まで見たことないんだ）

あの時、祭の終わりまで参加していたイリヤたちと違い、アルは祭の前半部分しか知らない。

だからおそらく彼にとって、祭とはただの楽しい宴といった認識なのだろうとイリヤは思った。

そして、そのままの方がいいのかもしれない、とも。

（……黙ってても、今度の祭で分かるもんね）

彼女にとってみれば……いや、トーマやメルも同じだろう。

祭の終わりに何があるのかを知った者、知っている者からすれば、それを考えるとどうしても気が重くなる。

イリヤにとって、今年の祭は特にそうだった。

「ねえ……アル」

だから彼女はアルに話しかける。

この場所で静寂を相手にしていると、どうしてもその事ばかり考えてしまいそうだったから。

「ん？」

「この丘……ここにね、私よく来るんだけど、知ってた？」

思い出の丘 1

「え……いや」

アルにとって、それは初耳だった。

そういえば時折、用事で出掛けた訳でもないイリヤの姿が見えないことがあったが、あれはこの場所に来ていたからなのか。

「私、ここが好きなんだ」

アルにとってみれば、予想していなかった突然の朗報である。

どうやって聞き出せばいいのかと悩んでいた質問に対する答えを、彼女の方から教えてくれたのだから。

「そ、そーなのかつ」

「うん。小さな時からね、暇な時によく来てるんだ……ここが好きだから」

言った。そして、聞いた。

彼女は「この場所が好きだ」と、たしかにそう言ったのだ。アルは思わず、小躍りしてしまいたいような気持ちになった。

助けがあったおかげとはいえ、イリヤとこうして会話が出来て、おまけに目標であった彼女の好きな場所まで聞き出せた。メルやトーマも、納得の大成ぶりだろう。

しかしアルの頭の中に、1つだけ疑問が浮かんた。

「……………」

なぜイリヤは、悲しそうなだろうと。

彼女はたしかに、ここが好きな場所だと言った。小さな頃から、暇があれば通うほどの。

であれば、なぜそれを言葉にした彼女は、悲しい顔をしているのだろうか、と。

「……どうしてなんだ？」

「え？」

「いや……なんでイリヤは、ここが好きなのかなあって」

「……うーん」

アルの質問に、イリヤは顔を彼の方に向けたが、質問の答えを考えているのか言葉に詰まり、再び海の方を眺めてしまった。

「……あれか？ 海が見えるから？」

「ううん。海だったら、ちょっとした高さがあれば島のいろんな所から見えるよ」

イリヤは微笑んで返してくれたが、アルは悩んだ。悩んだ末、偶然視界に入ったソレが目にとまった。

「わかった！ あれを見に来てるんだ。だろ？」

アルはそう言って立ち上がり、隣の丘にそびえる古代の遺産を指

差す。

自信のあった答えだったが、静かに首を横に振るイリヤの様子を見ると、どうやら不正解らしい。

「私、あれにはあんまり興味ないかな……こんなこと言ったら、村長とかに怒られちゃいそうだけどね」

軽く舌を出し、いたずらっぽく笑うイリヤ。
アルはしっかりと、今の発言を心の中に刻み込んだ。

（イリヤはあまり遺産に興味なし……と）

自信満々で思わず立ち上がってしまったアルだったが、とりあえず座り直した。

「んじゃあ、イリヤは何しにここに来てるんだ？」

「私は……」

イリヤは何か言いかけて、口を紡ぐ。その小さな唇が静かに動き出すまでには、少しの時間が必要だった。

「……アルは、星空ほしぞらって信じてる？」

彼女から尋ね返された内容についてアルの頭が理解するのにもまた、しばしの時間が必要となった。

「……ほしぞら？」

「うん」

「そりゃあ、話なら聞いたことはあるけど」

「信じては……いない？」

「……どーだろ」

村の大人達からも、メルやトーマからも聞いたことはある。昼は現れず、夜にしか見ることの出来ない空の名前らしい。

真っ暗な夜空に、『星』^{ほし}という光が数え切れないほど散らばって、実際に自分の目で見たことは無いが、それはそれは綺麗な景色なんだそうだ。

「嘘だつて言うつもりはないけど、本当なのはちょっと怪しいかなーって思ってる」

「そうだよね……」

（そりゃあ、ホントにそんなものがあるんなら、いつぺん見てみたいけどさ……）

「星空……か」

アルはそうつぶやいて仰向けになり、空を見上げた。

いつもと変わらず、ただ白い雲が隙間なく流れているだけである。物心付いたときからほとんど毎日家の外に出ていても、この雲が晴れた瞬間など見たことがない。

「……イリヤは信じてるのか？」

アルも彼女に尋ね返してみた。

島の大人達の中には、おとぎ話に近い星空の存在を妄信してお祈りやらの熱心な者も少なからずいたが、彼女はそういった感じには見えない。

というか、彼女のそんな姿は見たことがない。もちろん、アルにとつて見たことがないというだけだが。

「信じてるっていうか……待ってるんだ。私」

「待ってる……？」

アルはキョロキョロと周囲を見渡す。
相変わらず彼ら以外に人の気配は無い。

「トーマたちじゃなくて誰か来るのか？」

「ふふっ……誰かを待ってるんじゃないよ」

アルらしい反応にイリヤは微笑みを見せ、再び曇天を見上げる。

「私は星空を待ってるの」

「……へ？」

呆氣にとられ、ぼかんと口を開くアル。
イリヤは空を見つめたまま、話を続けた。

「嘘だと思つかもしれないけど……私、星空を見たことあるんだよ?。」

「えっ……」

「まだほんの小さい頃のことなんだけど……私のお父さんもお母さんがまだ元気だった頃に、1度だけね」

イリヤは幼い頃に両親を亡くしている。

彼らがまだ健在だった頃ということは、今から10年以上前のことになる。

「あつ……もしかして、あの噂って……」

「そう。10年前の、ね」

島民達の間で静かに語り継がれている、この島の奇跡。

それは今から10年前。

この島の上空で、それまで1度も変わることもなかった曇天が僅かに晴れ、星空が顔を覗かせたというにわかには信じ難い噂。

その現象が起きた時間が夜更けということもあり、目撃した者はいないという話だったが。

「イリヤ……見たのか!？」

「うん……お父さんとお母さんと。3人で」

イリヤは見上げていた視線を地へと落とし、思い出を懐かしむように足元の草に手をあてる。

「この丘で見たんだ……私は小さかったけど、今でもよく覚えているよ」

「……」

そういうことだったのかと、アルは納得した。
彼女にとってここは島の中でも特に好きな場所であり、今は亡き
彼女の両親との、大切な思い出の場所なのだ。

思い出の丘 2

イリヤの両親が亡くなったのは、10年前。
一夜限りの奇跡が起きてから、すぐのこと。

物心がついてすぐに両親とは永遠の別れとなってしまった彼女にとって、親と過ごした思い出は、決して多くはないはずである。

だからこそ、彼女はこの丘の上で見た『星空』を今でも忘れず、この場所に通っているのだろう。

両親との、数少ない思い出の場所だから。

「なあイリヤ……星空ってさ、どんなのなんだ？」

小さな頃から何度も耳にしているとはいえ、そのほとんどは信憑性の低い噂である。

話をする相手によって内容も相違点があるし、聞いたとしても頭の中で正確に想像することは容易ではない。

しかし目の前にいる少女は、自分の目で見たという。

彼女にとってもしかしたらツライ思い出なのかもしれないと思っただが、少年の心に湧き上がって来た好奇心には勝てなかった。

「そうだねえ……なんて言ったらいいのかな」

「やっぱりさ、キレイだったのか？」

「うんっ！　すごいんだよ？　こう……まっくらな空に、光の粒

がバァーっと広がって……」

彼女は身振り手振りを交えながら、自分が見たあの夜の奇跡をアルに語る。

噂でしかその存在を知らず、空想のものでしかなかったその、実際の目撃談を聞くのはアルにとって初めてである。

彼女の話聞いたところで、未だ頭の中で想像するしかなかったが、それでもそれまでよりはずっと信憑性があつたし、段違いに興味が湧いた。

「あーあ……やっぱり、うまく言えないなあ……」

イリヤはあの夜の衝撃を懸命に伝えようとしたが、言葉だけでは伝えきれないもどかしさを悔しがった。

「いや……でも、スゴかったっていうのは聞いてるだけで分かるよ」

「うん。やっぱり、あのすごさは話すだけじゃ伝わらないよ……自分の目で見たら、きっとアルもビックリすると思う」

「そんなに？」

「うんうん。そんなにだよ。なんて言うかなあ……スゴ過ぎて、全身の力が抜けちゃうって感じかなあ」

「そうなのか……」

アルは再び空を見上げる。

先ほどと変わらぬ曇天。雲が晴れる様子は皆無だった。

「……見てみたいなあ」

彼はもう、イリヤとの会話をほとんど意識していなかった。彼の関心は、彼女が話してくれた雲の向こう側へと移っていたからだ。

「……今年の祭で、見れるといいね」

イリヤは、アルが気付かない程度の声量で、まるで他人事のようにぼつりとつぶやいた。

「なあ、イリヤ」

「なに？」

「祭ってさ……星空が見れますようにってお祈りするためにやるんだろ？」

「うん。アルは前の祭を最後まで見てなかったから知らないだろうけど、島の人などで「雲が晴れてくれるように、星空がもう一度見れるように」って、空にお祈りするんだよ」

島のほぼ中央にある広場。

普段は子ども達の遊び場として、また、大人達の集会の場として使われているその広場が、祭の会場となる。

今この瞬間も手の空いている者達は広場に集まって会場の準備、祈りのための祭壇を用意したりと大忙しだ。

「雲、晴れるといいなあ……」

「ふふっ……アルも星空が見たくなっただ？」

「ああ！ スッゲー見てみたい……楽しみだなあ」

「……じゃあ、アルも準備を少しは手伝わなきゃダメだよ？ たまには顔を出せって、村長も言ってたし」

「うーん……それは面倒」

「もうっ。ちゃんとやらないと、空だって応えてくれないよ？」

「……はい」

まるで母と子のやりとりのような会話。2人は自然に笑った。なんの気恥ずかしさも、緊張もなく、ただ純粹に。

夢を見つけたらしい、凜とした表情で空を見上げるアルの横顔をイリヤは気付かれないように眺め、そして同じように視線を空へ向けた。

目を閉じれば今でも思い出せる、幼少の頃に両親とこの場所から見上げた星空。

雲の隙間から覗いたその景色は小さく、しかしとても美しく、あの日からずっとイリヤの心に残っている。

もしもあの星空が、この空いっぱいに広がったのなら、それはどれほど感動的なものだろうか。
想像しただけでも感慨深いものがある。

「私も……見たいな」

彼女はつぶやいた。

小さな、小さな声で。

「……………」

「え？」

それは、すぐ隣にいるアルが思わず聞き返してしまうほどの、小さな、とても小さなつぶやき。

「んーん。なんでもない」

彼女は答えず、穏やかな微笑みを見せる。

それを見たアルの頬は赤く染まり、その鼓動はまた高鳴るのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5599x/>

星空を、もう一度。

2011年10月19日02時00分発行